

事業の背景・目的

ツシマウラボシシジミは対馬に生息しているが、シカの食害により食草が減り個体数が激減している。当園では平成29年度よりツシマウラボシシジミ生息域外保全事業を行っている。現在飼育個体の無精卵数が増加しており原因究明のため実験を計画中である。フサヒゲルリカミキリは岡山県、長野県の高原に生息しているが、乱獲等により個体数が激減している一方、本種は昆虫園等施設内における安定的な飼育繁殖方法が確立されていない。飼育方法の確立のため飼育下での羽化と繁殖を目指す。

事業の内容

ツシマウラボシシジミ生息域外保全事業

- ・無精卵数増加の要因を、オスの給餌回数によるものと仮説を立て交配時期に実験を実施。
- ・交配は4月、6～7月、9月の3回実施し、それぞれ374、815、1518個体の幼虫を得た。
- ・9月交配分の個体は340個体を休眠させ、それ以外は人工飼料飼育や多頭飼育を試みた。
- ・休眠幼虫は333個体が生存していることを確認。
- ・生息域外保全についての展示は6/1～10/3にチョウの飼育スペース前、3/23～昆虫展示スペースにて実施。



フサヒゲルリカミキリ生息域外保全モデル事業

- ・前年度から飼育していた個体は6月にすべての個体が死亡していることが明らかになった。
- ・55個体の卵及び幼虫を導入し飼育を再開。
- ・六甲高山植物園から花茎の供給を受け、花茎を十分に与えることができた。現在41個体が休眠中。
- ・多品種のヘメロカリス属園芸品種が代用食として使用可能か検証するために4品種を購入。
- ・太い花茎が不足しがちなため、大きい株を栽培できるように圃場の整備を実施。



得られた成果

- ・ツシマウラボシシジミの無精卵増加の要因については今回の実験でも差異が見られなかった。オス個体の管理温度給餌頻度が直接的な要因ではないことが考えられる。しかし実験による個体管理の結果、例年よりも孵化率が向上していることからインキュベータを導入したことによるメス個体の管理温度の変化（管理温度の上昇及び安定化）が影響しているものと考えられる。
- ・フサヒゲルリカミキリについては、伊丹市昆虫館と飼育方法の共有を行い、うまくいった部分を取り入れながら今年度の飼育を行った。花茎の供給等により休眠するまで幼虫に十分な量の花茎を与えることができたため、生息域外保全を開始してから最多の41個体の幼虫を休眠させることができた。3月現在で外部から様子を確認できる個体は生存しており、来年度の羽化が期待できる。また今年度購入したヘメロカリス類は、翌年以降に代用食としての運用が可能か検証できる。ヘメロカリス類は多年草であり毎年花茎を伸ばすため、摂食が確認できれば今後の花茎供給の安定化に寄与することが期待できる。
- ・事業終了後も足立区の承認を得ることができれば継続する見込み。